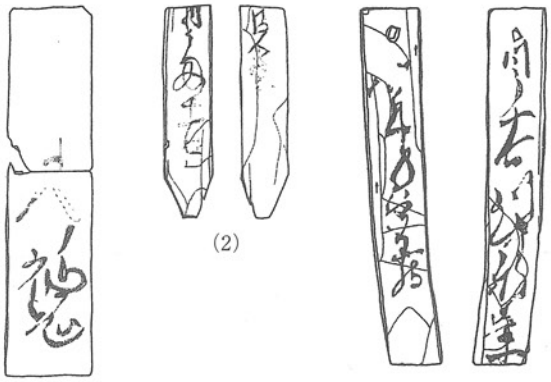
(2)は下端部を尖らせたもの。裏面には削った痕跡が残る。
(3)は短冊型。下部の三文字しか見えない。まじない札か。

9 関係文献

(財)島根県教育文化財団『米子城跡6遺跡』(一九九六年)

(中森　祥)



(1)　(2)　(3)

島根・山持(ざんもち)遺跡(Ⅱ・Ⅲ区)

1 所在地　出雲市西林木町

2 調査期間　二〇〇三年(平15)五月～一二月、二〇〇四年五月～一一月

3 発掘機関　島根県教育庁埋蔵文化財調査センター

4 調査担当者　池淵俊一

5 遺跡の種類　集落跡・自然流路・水田跡

6 遺跡の年代　弥生時代～江戸時代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

山持遺跡は出雲平野の北麓に位置し、奈良時代の神社建物などが検出され著名となった青木遺跡の西約二kmに位置する。遺跡は東西二km南北五〇〇mの範囲に及んでいる。

今回検出した主な遺構としては、弥生時代の自然河道・柵列・溝・土坑、奈良時代の畠状遺構・道路状遺構、中世後期の自然河道な

(今　市)

どがある。遺物の大半は、弥生時代の自然河道から出土した弥生土器である。

木簡は計四点出土した。(1)はⅡ-三区の下層水田面から出土したもので、時期は一五世紀以前と想定される。卒塔婆(2)～(4)はⅢ―二区七層から比較的まとまった状況で出土した。原位置は保っていないものの、比較的近隣から二次的に動いて堆積されたものと推測される。七層は低湿地の葦などが腐蝕して形成された土層で、層位的関係から古代末から中世後半に形成されたと考えられる。卒塔婆の年代は遺物からは特定できないが、資料の一部を採取し放射性炭素年代測定を実施したところ、一三世紀末～一五世紀初頭の年代が得られている。

8　木簡の釈文・内容

Ⅱ-三区下層水田面

(1)　や□□」　(96)×21×3　059

Ⅱ-二区七層

(2)　「位□者□
　　□月」　4224×160×80　061

(3)　「〔アーク〕(ア)□　□□□□〔十郎カ〕□□＝
　　□□□□□
　　□□□□□〔七月十日カ〕
　　＝□□□□□□□□□
　　□光□敬白　」　2842×140×114　061
　　〔来カ〕

(4)　「〔梵字〕□　(629)×69×37　061

(1)は付札状の木簡である。

(2)～(4)は柱状卒塔婆でいずれも墨書は肉眼では確認できず、赤外線観察によって初めて確認できた。他に墨痕のない卒塔婆が二点出土している。非常に長大であるのが特徴で、最長のものは四m以上にも達する。幅は一六cm前後と比較的均一である。いずれの卒塔婆も柱材の頂部を山形に作り出し、その下に二条の刳り込みをめぐらせているが裏面には及んでいない。頂部の下は柱材の一面をL字状にカットし文字を記す平坦面を作り出している。資料群は木製品ではあるが板碑によく似ている。

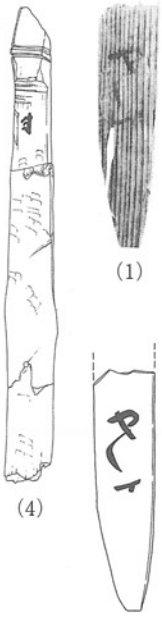
(2)は長さ四mを越える大型の完形品である。墨書の大半は消滅しているが、下半部に二行分が確認できる。西川津遺跡の例（本誌第一三号）などからみて、名前や日付に関する記載と考えられる。(3)は比較的墨書の遺存が良好な資料である。下端左行の「光来」は、

供養を行なった人物（僧か）に該当しよう。(4)は下端を欠く中型品。梵字一字のみが確認できたが判読できない。

9　関係文献

島根県教育委員会『山持遺跡Ⅱ・Ⅲ区』（国道四三一号道路改築事業（東林木バイパス）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ、二〇〇七年）

（池淵俊一・平石　充）



(1)　(1)　(4)

(3)部分　(4)部分

(2)部分

島根・山持（ざんもち）遺跡

1　所在地　島根県出雲市西林木町

2　調査期間　二〇〇六年度調査　二〇〇六年（平18）五月～一二月

3　発掘機関　島根県教育庁埋蔵文化財調査センター

4　調査担当者　原田敏照

5　遺跡の種類　集落跡ほか

6　遺跡の年代　弥生時代～江戸時代

7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

（今　市）

山持遺跡は、出雲平野の北辺、北山山系の南裾に位置し、北山から南に流れていた伊努谷川により形成された小扇状地及びその縁辺部に位置する、弥生時代から江戸時代にかけての複合遺跡である。国道四三一号線改築事業に伴い、二〇〇〇年から発掘調査を実施している。

二〇〇六年度調査で検出